スタンダール『恋愛論』における「恋人の長所」の実在性をめぐって

粕　谷　雄　一

1．「結晶作用」の見せるものは幻想か？

「あばたもえくぼ」ということわざに代表される現象があるということは，古今東西言い古されたことがらに属する。激しい恋に陥った人が恋の相手の中に，他の人の目からは見えないような長所をみつけてしまう，時には欠点さえも長点として見てしまう――こういう「錯誤」はいわゆる恋の狂気のあらわれの中でも代表的なものの一つであろう。またより一般的には，恋する者は現実を正しく見ないという意味で「恋は盲目である」という言い方もよくなされる。それで西欧の画家たちはしばしば愛の神に目隠しをつけて描いたのである[(1)]。

だが「盲目」という言葉は，実際に有るものが見えないということを意味するにせよ，実際には無いものを有るように見るということにせよ，積極的イメージを持つとは言い難い。もしもある人，ある論文が「恋愛は錯誤である」ことを認めた上でなおその恋愛を好意的態度で克明に描写するなら――価値観の相違云々は別問題として――間接的に読者を「錯誤の愛」に誘うものであり，現実から目をそむけ想像の世界へ逃避することを勧めているのであるととられても文句は言えないところである。

実際これが『恋愛論』*De l'Amour* の作者としてのスタンダールがかつて受けた批判なのである[(2)]。この本の中の有名な「結晶作用」cristallisation の定義を見るなら，それも無理からぬことと考えられる。

（A）私が結晶作用と呼ぶのは，頭にうかぶ全てのことから，愛する相手が新しい美点を

（1）E・パノフスキー『イコノロジー研究』，美術出版社，1971，pp.85－110に「盲目のクピド」についての詳しい図像学的説明を見ることができる。

（2）オルテガ・イ・ガセットがその急先鋒だろう（『愛について』，1941）。これに対する真正面からの反論を試みた例は無いようである。住谷裕文氏の「ミーナ・ドゥ・ヴァンゲル論」（『大阪教育大学紀要第1部門』第34巻第1号，1985）の議論も「結晶作用＝錯誤」論の完全な否定を目指してはいない。内容，主張の上でほとんど関係はないものの，拙論は住谷氏の論に触発されたものであることを僭越ながらつけ加えておく。

持つという発見 découverte をひきだす精神のはたらきである。... 一言で言えば，愛する相手の中に或る長所を見るにはその長所を考えるだけで十分というわけだ。(第2章p. 9[3])

(B) ...我々にあらゆる美を見い出させる apercevoir あの狂気 folie の行為を表すために使われた結晶作用という言葉... (第3章原注，p.14)

だから『恋愛論』の注釈者 H.Martineau も，

(C) これ（結晶作用）は，愛 Amour とは目隠しをつけ目の見えない状態で行動するものに他ならないとする神話の再確認であり説明である。(同書，p. xvi)

という言い方をしているのである。

こういう解釈は必ずしも間違いではない。恋愛によって見出した長所が幻想にすぎなかった例とみなせるエピソードは『恋愛論』の中に確かにある。しかしだからといって『恋愛論』全体の主張が虚構の愛への逃避であると考えるのは早急すぎると思われる。

以下では『恋愛論』を恋愛論として読むことを試みてみる。つまり恋愛という現象の性質とその扱いについての有益なアイディアをこの本の主張自体から汲みとってみようというわけである。そのため『恋愛論』の自伝的あるいはフィクション文学的な側面[4]は一応考えの外に置き，また途中で語り手が交代しても主張の一貫性には影響を及ぼさないものとしておく[5]。

但し『恋愛論』は，恋愛の論述としては確かに著しく秩序を欠く。おそらく最大の難点は，ある主張があってもその主張が有効である範囲，前提条件がはっきりしない，という

---

(3) 以下『恋愛論』からの引用は Garnier 版（Henri Martineau 校訂，1959）を底本としその頁数を記す。訳，強調等は但し書きがない限り筆者によるものである。

(4) 『恋愛論』における自伝的要素については既に多くのことが語られている。なお鎌田博夫氏「スタンダール『恋愛論』における登場人物たち」『東北大学日本文化研究所研究報告第22集』，1986）ではこの作品を「小説へむかう前段階の創作」(同p. 170)としている。

(5) 『恋愛論』の語り手は一応今は亡きイタリア青年リジオ・ヴィスコンティである旨注記してある（第1章原注，p. 7）が，途中で語り手が交代していてその境目がはっきりしない。cf. 宇田川和夫氏の「『恋愛論』の mystification について」(FLAMBEAU 13，1985)。梶野吉郎氏はこの種の交代を「singulier な実存の内面を表現する手段」としている（*Au Milieu d'un Désert d'Hommes*『北海道大学外国語・外国文学研究 XXII』，1976，p. 335)。

ことだろう[6]。本論文では場合によっていろいろな前提条件を想定してみるが，これは論理的に一貫した読みを得るために絶対必要な措置である。『恋愛論』の語り手は読者が「欠けている五，六語を補って」(第3章原注，p. 14) 読んでくれることを願っているのである。

そして『恋愛論』からはっきりした主張をひきだすために，こちらの方からテクストに向って質問を投げかけてみる。それが「恋する者が恋の相手の中に見るという長所とは，結局実在するのかしないのか」というものである。この質問を選んだのは，これこそ我々自身が恋の主体となったとき一番切実に感じる問題の一つだからである[7]。

2．「恋愛論」は「恋愛は錯誤である」という断定を微妙に避けた書き方をしている。

もう一度結晶作用の最初の定義，引用の（A）の下線をひいた「発見」découverteという語に注目してみよう。概念上「発見」とは，たしかに存在しているが未知であったものが既知の明るみに出されたことを意味するはずである。だから，詭弁めくが，この語を字義通りにとるならここでは長所は実在することを前提としていることになる。

「長所は実在する」が『恋愛論』の主張だというわけではない。後で見るように全ては確率の問題なのである。しかしここであえて「発見」という言葉が使ってあるからには，これも後述するがその確率は決して低いものではないことを暗に言っているのではないか。こう考えても論理的に矛盾は生じないというのが筆者の見解なのである。

「発見」された長点が本当は幻想にすぎないというのなら，「発見」という言い方は一種アイロニーのようなもの，論述している主体が一瞬恋の当事者の視点，立場，言葉を採用したものということになるが，読者にそう読ませてしまうのは「当然恋愛は錯誤である」という考えが既に先入見としてあるからに他ならない，ということではないだろうか。

引用（B）の「見い出す，気づく」 apercevoir についても同じことが言えるのは明白であるし，「狂気」folie の語については，こちらの方こそアイロニー的な用法であると考えてなんら不都合はない[8]。

また次のような形で「結晶作用」を説明している個所もある。

（6）たとえば，情熱恋愛の場合とそれ以外の愛の場合，未熟な愛の場合と経験者の愛の場合などの区別である。これは G. Genette の指摘する数々の省略法 ellipse の一種であるとも言えようが（《Stendhal》 in *Figures II*, Seuil, Collection Points, 1969, p. 180以下)，問題は，このような省略の場合，本当にそこにあるのかそれともないのか決定しようがないということである。

（7）恋愛において問題となる疑惑のもう一つはもちろん，「相手は私を愛しているだろうか」である。『恋愛論』としてもこちらの方をより重要とみなしているのだろうが，男女の愛のかけひき等といった微妙な要素もあり扱いがより困難であるので，機会を改めて論じたい。

（D）この語は使うのをやめてしまうか，または文学的才能がないのでそうもいかないというなら，私が「結晶作用」という語で一種想像力の熱病のようなもの，たいていの場合かなりありきたりであるような対象を識別困難にし，別の存在にしてしまうようなものを意味しているということを何度も述べるように，と人は私にまっさきに忠告するのである[(9)]。(第15章原注，p. 38)

構文によく注意するなら，「対象を別の存在にしてしまう」という，結晶作用がはっきり錯誤であることを明言した定義の出所，責任の所在は，『恋愛論』の語り手をすりぬけて彼にアドヴァイスする友人たちにあるともとれるようになっているではないか。

また「ザルツブルクの小枝」の章にも同種の責任回避を見ることができると考えられる。この章は「結晶作用＝錯誤」説を『恋愛論』が支持しているととれる例を多く含んでいるのだが，それが最もはっきり主張されているところ，たとえば：

（E）「ああ，わかりました。人がある女性に専心しはじめたら，もう彼は彼女を彼女の本当の姿としては見ず，彼女がこうあってくれればよいという姿で見るということですね。」(p. 344－5，強調は著者)

のようなセリフは，語り手と対話しているゲラルディ夫人のものである。語り手自身はここまで断言していない。それでも「あなたは彼が思っているほど美しくない」などと当の女性に向って率直に言うことはどうしても失礼になってしまうという状況が語り手の留保

（8）『恋愛論』の著者における「狂気」folie については，S・Felman が綿密な分析を行なっている。この語の両義性，アイロニックな様相を指摘しながら彼女は次のように言っている。

「happy few(幸福な少数) こそが，archi-lecteur(全て鵜呑みにしてしまう読者) の肩ごしにスタンダール特有の目くばせに気づく者，メッセージの本当の受取人なのであり，用語の転倒を遂行し，第二の水準で理解できる人たちなのだ。彼らのためにこそスタンダールは（中略）《狂気》に関する単純な判断を自分は受け入れないのだということを苦心して合図しているのである。」(*La* 《folie》 *dans l'œvvre romanesque de Stendhal, Corti,* 1971, p. 42)

（9）原文は次のとおり。

On me conseille d'abord d'ôter ce mot, ou, si je ne puis y parvenir, faute de talent littéraire, de rappeler souvent que j'entends par *cristallisation* une certaine fièvre d'imagination, laquelle rend méconnaissable un objet le plus souvent assez ordinaire, et en fait un être à part.

を単なる婉曲と見せる背景になっているのである[10]。

また De l'Engouement「(一時的な) 熱中について」なる題をつけられた章の中にこんな説明がある。

(F) これらのあまりに熱烈な魂，発作的と言えるほど熱烈な魂は，いわば信用貸で恋をする。いわば対象を待つかわりに対象の方へ身を投げていく。

これらの魂は，対象の本性の結果としての感覚が自分に到達する前に，遠くから，それどころか見る前から対象を想像上の魅力でおおう。この魅力の汲みつくされることのない源泉は，これらの魂自身の中にあるのだ。(第22章，p. 52)

「結晶作用」が一般的に言って錯誤だというのなら，この章で描写されているのが典型的な「結晶作用」ということになる。ところが，テクストに従えばこれは「感受性が多すぎたり少なすぎたりする，人生の両極端」(同)の片方なのである。ということは，たとえこれが結晶作用の描写だとしてもその単なる一例，悪い一例であるということになる。『恋愛論』がいくら秩序を欠いた論述をしているといっても「結晶作用は悪い例においては錯誤となる」と書いてあるのに，「結晶作用は一般的に言って錯誤である」ことを主張しているとはとりにくい。ここにおいては既に間接的ながら成熟した魂のおこなう結晶作用が暗示されているのである。

---

(10) ここまでの（そしてこのあとの）筆者の解釈が奇矯に見えるとしたら，それは，この考えを認めると『恋愛論』の作者が自ら誤解されるために書いていることになるからだろう。「恋愛は錯誤である」という通念がある以上，それと微妙に違うことを主張するならその違いを明確に表明することが要求されるはずだからである。少くともゲラルディ夫人の話し相手は彼女の意見を「訂正」すべきだと言える。

しかし「スタンダール」の人格的一貫性を想定するなら，このようなやり方こそ彼に典型的なものである，というのが筆者の見解である。つまりpを表現しながら何らかの手段でそのpが not pを意味している如く一般読者に信じこませて自分がまぎれもなくpを表現しているという可能性が残っていることを隠そうとするというやり方である。

『赤と黒』において彼が「偽善」hypocrisie という言葉をちらつかせて Julien の信仰，愛情の真正さを読者から，また Julien 自身から隠してしまっていると考えても論理的に矛盾を生じない，というのが拙論「Julien Sorel の hypocrisie と読み手の問題」(*GALLIA, XXV,* 1985所収) の主張であった。『恋愛論』においても，「恋愛は錯誤である」という通念が「発見」の語をアイロニーと見せ，ゲラルディの「結晶作用」の定義が語り手のそれを隠してしまっていると考えることが可能なのである。

3．恋人の長所は日々の親密な交渉の中で確かめていくしかない。他人の判断は役に立たない。

『恋愛論』は決して恋人の長所の虚構性を前提にしてはいないことを確認した。

さて恋の当事者にとって大切なのは，結晶作用が錯誤であるかもしれないと思ったときどうすれば客観的判断を得られるのかということである。これについて『恋愛論』はどう考えているだろうか。

テクストを読む限り，適切な判断をすることは一応不可能ではないのだがそれには親密な関係になることが必要だという事になる。

（G）恋する相手とうまくいかないときは，想像上の解決のための結晶作用がある。つまりあなたの愛する女性の内に或る美点が有ると確信できるのが想像力によるのみであるというときだ。親密な関係になった後は，絶えず起ってくる心配が，より現実的な解決によって鎮められる。(第6章，p. 17．強調は著者)

だから恋の主体の立場から言えば，恋が成就する以前，または恋の成功が不可能になったときに場合を限るなら，長点の実在性は未確定なまま残ることになる。

客観的判断ということが問題になっているなら，信用できる友人に相談すればよいではないか，という意見はすぐにでるところであろう。どんな人も，喜びや悲しみを分かちあってくれる幼な友達をひとりやふたりはもっているものだから，そういう人にアドヴァイスを求めれば全て解決するのではないか。

しかし『恋愛論』においては，友人に情熱恋愛をうちあけることが固く禁じられているのである。

（H）親友に情熱恋愛をうちあけることほど敬意を欠き，すぐに罰が当る行為はない。その親友は，あなたの言っていることが本当である場合，あなたが彼の千倍もの快楽を味わっていること，あなたの快楽からすると彼の快楽などとるにたらぬものに見えることを知っていることになるからだ。(第34章，p. 102)

つまり相手に嫉妬や羨望を起こさせるだけだからやめた方がいいというわけである。

同じくそのへんにいる平凡な人々に恋の相手に関する判断をあおぐのも意味がない。彼らは，女性に対しては世間体といった言葉を使って「彼女に残された唯一の，無限の幸福」たる恋愛を思いとどまらせようとやっきになるだろうし（第30章，p. 86)、男性に対しては「浮気な女しか扱っていない，大体において最もありきたりの事例に基づいている理論」しか提供しないのであるから（第2章，p. 2)。

もっとも，恋する主体自身が平凡，野卑な人々のカテゴリーに入る場合にはこの議論は

あてはまらないが，そういうことは『恋愛論』では考えられていないのだろう。著者は「ただ百人の読者のために」書いているのである（第二の序文，p. 328)。

しかしこれらの理由にもまして他者に判断を求めることを無価値とするのは「美の相対論」である。第三者の目には恋する者の見る美点が見えないとしても，それは恋の対象が「第三者の目にとっては美点でないような美点で飾られているから」である（第3章，p. 13)。

（I）ところで美とは一体何だろうか。それはあなたに快楽を与えられる新しい能力のことである。

各個人の快楽はそれぞれ異なっている。しばしば正反対ですらある。このことこそ，ある個人にとって美であるものが他の人にとって醜になってしまうことへのよい説明になろう。(中略) 愛というものをデル・ロッソはあきらかに肉体恋愛のこととして理解しているし，リジオの方は情熱恋愛のことと思っている。だから美という言葉について彼らの見解が一致しないのはあまりにも当然なことなのだ。(第11章，p. 29)

こういう立場に立ってしまうと，他人にアドヴァイスを求めるのはけんかになるだけ無駄だということになる。要するに恋の主体が客観的判断を求めて第三者に問うたとしても（これさえも前述のように恋愛のモラルからは禁止されているのだが)、彼の判断は個人的意見でしかありえず，あまり参考にはならない。

しかしそれでも恋愛中の人にとって「絶えず魂をとらえる恐ろしい疑惑について筋道だった話をする相手としての友人ほど精神的に必要なものはない」(第34章，p. 102)のである。まさに「恋しはじめた瞬間からはどんなに賢い男でも対象をありのままに見ることができない」(第12章，p. 32，強調は著者)のだから。恋人の長所の実在性という本論の問題意識自体がそもそも，自分の判断を信用できない恋する主体に属するものなのである。第34章ではノートをとっておいてあとで判断するというやり方が勧められているが，絶対の方法ではあるわけもなく，ただ「たぶん一番賢明なやり方」だというだけである（p. 104)。

4．恋愛に賭けるべきである。

結局，恋の相手と親密な関係になる以前には長所の実在性を確実に判断する方法はなく，純粋に確率の問題になってしまう。だから恋する者は，思いちがいをしている危険を感じながらも無上の幸福の可能性を追求して恋愛に賭けるか，それともそこから身をひいて貞節を守るか，決めなければならない。

もちろん『恋愛論』は恋愛に賭ける方へ読者を誘うのである。

まず大きな主張として，いったん恋がはじまってしまったら恋以外の快楽がとるに足らぬものになってしまうということがある。狩でもして気をまぎらわそうとしても「そこに

は何の快楽もないことを明白に感じる。」(第6章，p. 18)。

恋の強力さについて『恋愛論』は次のような説明を用意する。

(J) たとえば彼女が優しく tendre あって欲しいと思う。すると彼女は優しい。今度はコルネイユのエミリーのように誇り高く fière あって欲しいと思うと，多分この二つの性質は並存し難いと思えるのに，彼女はたちまちローマ風の魂を持ってあらわれる。恋愛が情熱の中で一番強力なものであることの精神的理由がここにある。他の情熱では欲望は冷たい現実に甘んじなければならないのに，恋愛では現実の方が急いで欲望に合わせるのだ。(第12章，p. 31)

このような例を見ると今度こそ恋愛錯誤説の主張かと思えるが，そうではない。なぜなら『恋愛論』は後の方で tendresse と fièreté の並存こそ本来の姿としているからだ。「これら二つのものは原因と結果の関係にあたるので両方が一緒でないということは滅多にない」のである（第26章，p. 66)。この第26章の主張の方を信じるなら，結晶作用はある真実を啓示したことになる（それが，それまで隠れていた両概念の関係が見えてきたということか，あるいは両概念の意味論的広がりが変形したということなのかという問題については今はおこう)。

また今述べたことにも関連するが，結晶作用は非常識な，物理的に不可能な結晶を作りえないことがあらかじめ前提となっている可能性が考えられる。つまり結晶作用は十分条件づけられているということだ。

たとえば極端な例として，鼻のない男を恋人にしていたというロシアのC妃（第19章原注，p. 46）が結晶作用を起したとしても「彼は美しい鼻をしている」とは考えつかなかっただろう。またゲラルディ夫人のあばたのある茶色の手をほめたたえたバヴァリア士官(「ザルツブルクの小枝」, p. 343) がどんな表現を使ったか記されていないが「あなたの手にはしみひとつない」とか「あなたの手は白い」とかはおそらく言っていないと思われる。詭弁めいた話になったが，この種の極端な例は一見「恋愛は錯誤である」ことの例と見えながら実は「美とは幸福の約束である」(第17章原注，p. 41）の例と考えることが常に可能なのである[11]。このようなものを除いた普通の結晶作用の結果とは，おおむね常識的なものと言っていいのではないか。「(一時的な）熱中」engouement とか「一目ぼれ」 coup de foudre とかは大きな錯誤をなすようだが，これらは未熟な魂のおちいるワナなのであり，

(11) 但しこのような美の相対論，美とは愛の喜びを示す記号にすぎないという考えを徹底させると，美醜の区別は無意味となり本論の「美点の実在性」の如き問題意識自体が雲散霧消してしまう。なんらかの実質を持った美点と，幸福の単なる記号としての美との間の境界線は画定できるだろうか。著者にもわからなかったかもしれない。

経験を積んだ魂のする恋は，（F）の引用にもあるとおり「対象の本性の結果としての感覚が自分に到達する」のを待つのだろう。ならば彼らの結晶作用はあまり妙なまちがいはしないことが暗に想定されていると言えそうである。

5．恋愛の護教論としての『恋愛論』。

このように，読者を「賭け」に誘なおうとする『恋愛論』は，一面から言うと恋愛の護教論なのである。つまり，恋人の中の長所，愛するための原因を求める者は，それを見出すだろうと教える。不幸の経験を積んで疑い深くなった魂には，成功の確率は悪くないと教えるのだ。

もちろんこれが『恋愛論』の唯一の読み方であるわけではない。このような豊かな本は，いろいろな読み方ができるはずなのである。